

玉鬘十帖の方法と成立

——玉鬘の運命と和泉式部、そして妍子——

川 島 絹 江

序

『源氏物語』玉鬘十帖については、今までに様々な観点から考察がなされている。成立、構想論では、この玉鬘十帖が問題にされる⁽¹⁾ことが多かった。また、玉鬘登場の意義、六条院での位置付け、玉鬘が尚侍となる意義、鬚黒の手に落ちる意味付けなど、本文の読みを通して、作者の創作方法を問題にする立場もある。⁽²⁾『宇津保物語』『住吉物語』といった先行文芸との関わりも⁽³⁾忘れてはならないだろう。

本稿は、玉鬘十帖に、成立当時の、それもある特定の一時期の話題や社会状況が反映されていることを明らかにし、玉鬘十帖に対する新しい読みを試みてみたい。

一、玉鬘求婚譚の始発

夕顔の遣児、玉鬘の物語は、玉鬘巻から真木柱巻までの十帖に、点々と、かつ連続して描かれている。

玉鬘巻は、夕顔死後の玉鬘の生い立ち、筑紫下向と上京、源氏に

引き取られ、六条院入りを果すまでを描く。続く初音巻では、六条院初めての正月が描かれる一方、花散里に託され、男踏歌の後、明石の姫君と紫の上に対面し、六条院の一員としての第一歩をふみはじめ玉鬘が描かれる。この二巻は、時間的に連続しており、玉鬘の物語の序章とも言える巻々である。

次の胡蝶巻から、玉鬘をめぐる男たちの求婚譚が始まる。胡蝶巻は、前半の、六条院の三月における紫の上と秋好中宮の春秋競べが名高いが、後半、四月には、玉鬘の求婚者が出そろう、玉鬘の婿選びに余念のない源氏自身が、初めて、玉鬘に求愛の情を示してしまいう重要な巻でもある。源氏を含めて、玉鬘をめぐる男たちの求婚話を、玉鬘求婚譚と名付けるならば、胡蝶巻は、その始発の巻である。

「更衣の今めかしう改まれるころほひ」に、玉鬘のもとには、兵部卿宮、鬚黒右大将、柏木等の恋文が届いている。親ぶってはいらぬものの、源氏自身、玉鬘に対して、平静な気持ちではいられない。時は四月。心にかかって、しばしば玉鬘を訪れていた源氏は、

雨のうち降りたるなごりの、いとものしめやかなる夕つ方、御

前の若楓柏木などの、青やかに茂りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出だしたまひて(三一176)⁽⁴⁾

という、ある雨上がりの夕方、感情をおさえきれず、玉鬘に求愛の情を示してしまうのである。その場面は、次のように描かれている。

なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、…(中略)…箱の蓋なる御くだものの中に、橘のあるをまさぐりて、

「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほえぬかな世ともの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思しうとむなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてものしたまふ。

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ
(三一177-178)

この場面が、『古今集』(夏、よみ人知らず)の

さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする
を本歌としていることは、諸注の示すとおりである。

『河海抄』では、玉鬘の「袖の香を…」の歌に対し、次のように記す。

橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜をけとましときはにして
(真本五句とましときはは心)
さ月まつはな橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

和泉式部日記云、弾正の御子かくれ侍てのち、帥のみこ、たちばなをつかはして、「いかゞみる」といひて侍ければ、かは

るかによそふるよりは時鳥きかばやおなじ声やにたらん⁽⁵⁾

『和泉式部日記』を掲げるのは、『岷江入楚』も同じである。右引用の『日記』の文章は、現存の『和泉式部日記』というより、『宸翰本和泉式部集』の詞書にそっくりであるし、『千載集』(雑歌上 98番)の詞書にも近い。また、『和泉式部集』正統両方に載るものであり、『和泉式部日記』の成立の問題もからんでくるので、現存の『和泉式部日記』とは限定できない。しかし、この場面が、和泉式部に關わるという指摘は注目に値する。

玉鬘の歌に限らず、この場面全体に『古今集』の「さ月待つ…」の歌が背景におかれていることは確かであろう。「橘」「袖」がモチーフとして使われ、忘れがたき「昔の人」夕顔と、眼前にいる玉鬘が重なり、それが源氏の思いがけない行動の引きがねとなる。

また、この場面が、

夢よりもはかなき世のなかを嘆きわびつゝ明かし暮すほど
に、四月十余日にもなりぬれば、木のした暗がりもてゆく。築地のうへの草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、…(下略)…⁽⁶⁾

と、書き出される『和泉式部日記』描くところの、和泉式部と帥宮の愛の始発の場面に近似することも確かであろう。時も同じく四月。「草あをやかなる」頃。「橘」という小道具、その背景に本歌として『古今集』の「さつきまつ…」の歌が存在する点、亡き人とその血縁者が二重写しにされ、恋が始まる点、両者に類似点は、きわめて多い。

しかし、違いもはっきりしている。和泉式部の方は「橘の花」、源氏の方は「橘の実」。和泉式部の方は、亡き人とその血縁者が兄

弟だから「花」が使われ、源氏の方は、母娘だから「実」が使われているのである。歌の贈答も、『源氏物語』では、対面の場で、橘の実を媒介として、男から亡き人に二重写しにされた女へ、そして女から男へと行なわれる。和泉式部の方は、まず、亡き人の縁者である男から女のもとへ橘の花が贈られ、「いかが見給ふ」という問いかけがなされる。それに対して、女から男へ歌が贈られ、男から女へ歌が返される。その歌は、まだ見ぬ人に対する興味の表明であり、対面への期待がこめられる。そして、この贈答には、互いの邸を往復する仲介人が存在する。(故に、世間に喧伝される可能性があるわけである。)

このようなはつきりした違いは、むしろ、意図的なものである可能性もある。

『和泉式部日記』の成立に関しては、作者が和泉式部自身か否か、成立は、作者が式部ならば帥宮邸移転直後か、帥宮死後服喪中か、晩年か。作者他者説では、院政時代成立という説もあるなど、きわめて難しい問題をかかえてきたが、現在は、和泉式部自作説に傾いているようである。筆者もそれが妥当と考える。また、執筆の時期は、大橋清秀氏の説く如く、『日記』執筆のもとになったであろう往復書簡が、敦道親王の服喪あげと同時に、経紙としてすかれたであろうことから考えて、服喪中であろうと考えている。これは、稿を改めて考えてみたい。

今問題となるのは、『源氏物語』玉鬘十帖執筆当時、『和泉式部日記』が存在したかどうかである。これは何ともいいがたい。両方も成立年時が、明確にはわからないのだから。(10)しかし、『日記』が存在していても、和泉式部と帥宮の恋愛事件が、当時の貴族社

会において、かなりスキャンダラスな話題として、衆目を集めたことは、『大鏡』や『栄華物語』の記述から推察できる。その恋が、古歌を背景とした「橘」で始まったことも、また、その時の贈答歌も、おそらく噂話として、世間に広まっていたのではなからうか。(11)

和泉式部と帥宮の恋愛は、『日記』によれば、長保五年四月十日日に始まる。『日記』は、その年の暮れ、十二月十八日に、式部が帥宮邸に引き取られ、それからまもなく、年が明けた長保六年(改元されて寛弘元年)正月、宮の北の方が、姉の春宮女御の迎えて、里に退去するところで終わっている。橘道貞との間に小式部をもうけながら、彈正宮為尊親王との恋に落ち、その死後は、弟の帥宮に愛され、北の方まで追い出してしまったとなれば、ずいぶん注目を集めたことだろう。『大鏡』兼家伝によれば、和泉式部と帥宮は、二人の仲を誇示するかのようになり、賀茂祭(寛弘二年四月二十日のことかと言われている)に華々しく同車して出かけている。この二人の恋は、寛弘四年十月二日、敦道親王の死によって、終焉を迎えた。

では、その間、紫式部はどうしていたか。長保三年四月二十五日、夫宣孝が亡くなり、紫式部は寡婦となっていた。寛弘二年か三年の十二月二十九日、中宮彰子のもとに出仕するまで、紫式部は、寡婦としてわび住まいのかたわら、『源氏物語』を執筆していたと推測される。出仕後も執筆し続けたであろうが、とすると、衆目を集めた和泉式部の恋愛事件が起こったころ、紫式部は、『源氏物語』を執筆していた可能性が高い。

ここで、筆者が主張したいのは、玉鬘求婚譚の始発が、和泉式部と帥宮の愛の始発に近似するということである。そして、紫式部

が、和泉式部と師宮の恋愛話を、『源氏物語』に取り入れることができる状況にあったということである。

二人は後に、共に彰子に仕えた。『紫式部日記』には、寛弘七年中書かれたと思われる消息文の部分に、和泉式部評がある。「けしからぬかたこそあれ」と、その人間性を問題にしながらも、その文才も歌才も認めている。「口にいと歌の詠まるる」という評は、和泉式部の歌才が天性のものであることを認めているからに他ならない。「まことの歌よみさま」ではない、「はづかしげの歌よみ」とは認められないとする酷評は、伝統を重んじ、学識豊かで、品行方正である紫式部にとつて、和泉式部の奔放な生き方や、その生き方を反映する歌の詠みぶりに、異和感を感じるからであろう。しかし、和泉式部の和歌は、その話題性もあるが、世評に高く、紫式部も、それを認めずにはいられなかったと思われる。『日記』からは、和泉式部に対するライバル意識さえ感じられる。

二、玉鬘十帖の気象

周知の如く、玉鬘十帖の初音巻から行幸巻までは、源氏三十五歳の一年が、月次形式で描かれていると言われている。落成したばかりの六条院に、新しいヒロイン玉鬘をむかえて、優美な王朝絵巻を展開する玉鬘十帖は、六条院最初の一年を描くという要素と、玉鬘が六条院に引き取られてから、六条院を去るまでの、玉鬘求婚譚を描くという要素と、二つの要素が巧みに絡み合っていてきていると言えよう。

六条院完成から、六条院に流れた時の経過をたどってみると、次のようになる。

	少女	玉鬘	初音	胡蝶	螢	常夏	篝火	野分	行幸	藤袴	真木柱
	源氏三十四歳		三十五歳		三十六歳	三十七歳					
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月
八月	十月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月初	八月	十二月

初音巻から行幸巻までの一年で、九月、十月、十一月が除かれているのは、すでに少女巻、玉鬘巻で、六条院最初のそれらの月が語られているからであろう。六条院最初の一年は、少女巻最終部から、玉鬘巻後半部を経て、野分巻までと言った方がよいかもしれない。野分巻は、その総括として、夕霧の目から、改めて六条院全体をながめた巻といえよう。

さて、今度は、玉鬘求婚譚の方から考えてみよう。玉鬘求婚譚の始発は、胡蝶巻後半部、更衣が過ぎ、四月の雨もようの頃であった。続く螢巻は、五月を描くが、

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、…… (三一202)

とあって、例年のない梅雨のはげしい頃である。常夏巻では、たいそう暑い夏の日、玉鬘の処遇に苦慮する源氏が描かれ、篝火巻では、七月初秋、次第に源氏にうちとけはじめた玉鬘が描かれる。野分巻では、八月、

野分例の年よりおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。

と、例年になく大台風があり、その野分の中の六条院の有様が描かれるのである。

気象学者久米庸孝氏は、『源氏』の「台風」⁽¹³⁾という文章の中で、初音巻から行幸巻までの一年間の気象を、気象学者という立場から詳細に分析しておられる。

まず、蜚巻。先に引用した部分から、梅雨季の雨が平年よりはげしく降ったことを指摘。常夏巻からは、この夏が非常に暑かったことを指摘されている。それはこうである。

「風はいとよく吹けども、日のどかに、曇りなき空の」という一句があって、これが、実はその日の気圧配置を、鮮かに浮き出しているのである。天気図学の眼で見ると、夏京都で風が強くて快晴というのは、沿海州方面が低圧部となり、太平洋高気圧が日本の南方海上に張り出している場合であって、この型の気圧配置なら、ふつう一週間から十日くらいは酷暑がつづくはずである。だから、暑かったのは何もこの日(常夏巻に描かれる「いと暑き日」、筆者注)だけでなく、この夏は暑い夏だったのだと推定することは、決して無理ではない。

また、北山の水を引いた釣殿が「水のうへ無徳なる」状態であるのは、地面の過熱を示し、

地面の過熱は、連日の晴天を意味する。要するに、この夏は暑い夏だったのである。

とされる。

野分巻では、久米氏の分析はさらに詳細を極める。野分の描写と、光源氏の義母、大宮の「こころ齡に、まだ、かく騒がしき野分にこそ、あはざりつれ」という発言から、

まず二十年か三十年にいったんくらいに猛烈な台風だったらしい。

と推定。さらに、風速二十五メートル以上の北東風の風台風で、台風を中心は、京都のすぐ南を南西から北東に抜け、紀伊、大和、伊勢などでは、南寄りの大暴風が吹いたはずだとされる。そして、

右の台風の描写が非常に迫真力に富み、しかも、その時間的推移が、天気図学的にきわめて精確であることから、物語の時代設定や、内容のフィクション性はともかくとして、この台風自体は、紫式部みずからが直接体験し、メモをとり、それを小説の中に使ったとしか思われない。だからこの台風は、彼女の生きた十世紀末から十一世紀初頭の台風で、しかもおそらくは、彼女の作家活動のもっとも盛んだったころのものではないかと推定され、具体的な資料にあたって、もっとも容疑の濃厚なものとして、長保五年八月二十八日の台風を掲げる。

筆者は、この久米氏の論文の存在を、高橋和夫氏「日本文学と気象」で初めて知ったのであるが、高橋氏は、久米氏の御論を紹介するのと同時に、藤原行成の日記『権記』長保五年八月から、

廿八日乙酉 雨雷此夜風

という資料を加え、久米氏の説を補強しておられる。

初音巻から行幸巻までの一年の特徴は、例年になく長雨、酷暑、大台風である。久米氏の論を再び引用しよう。

この七帖の中の自然環境は、恐らくは現実の一年を、そのままとりいたたけはなかるうか。どうも、継ぎはぎしてでっちあげた一年だとは考えにくい。そして、もしそれが現実の一年であるならば、それは長保五年とみるのがもっとも自然で無理が

ない。

長保五年五月十九日には洪水が起っており、「長雨、例の年よりいたくして」に一致する。が、長保五年といえは、久米氏も高橋氏も指摘する如く、『和泉式部日記』に描かれた、和泉式部と帥宮の愛の一年ではないか。『和泉式部日記』にも、長雨、洪水の記事が見え、『本朝世紀』『日本紀略』でも、五月十九日（現行暦六月二十七日）に洪水が起こって、二十日には京中が大水になったことが確認できる。

また、常夏巻の酷暑について、久米氏は、史実に言及されていないので、筆者が独自に調査した。『本朝世紀』では、六月一日から八日（現行暦七月八日から十五日）まで、天候がくずれているが、六月九日から十六日（同七月十六日から二十三日）まで、八日間、「天晴」が続いている。六月十七日（同七月二十四日）のみ、天候の記録はないが、十八日以降は、次のようになっていた。

十八日（同七月二十五日）天晴。

十九日（〃 二十六日）天晴。

廿日（〃 二十七日）天陰。微雨屢降。

とあって、もし、十七日も「天晴」であれば、十一日間、「天晴」が続いていることになる。また、廿一日から廿三日（同七月二十八日から三十日）まで、三日間、「天晴」が続く。

廿四日（同七月三十一日）朝間天晴、午後雨降。

廿五日（同八月一日）以降も「天晴」が続く。

『権記』では、同年六月廿日の条に、

廿日戊寅 詣左府、北馬場納涼、右衛門督設食、有基局破子、祐舉則友兩大夫圍碁、祐舉勝、給懸物、又競馬二番、秉燭

以陰夜待月題有和歌、右藤中將同車歸家、

とあって、左大臣道長が、北馬場で「納涼」の会を催し、右衛門督奔信が食を設け、碁や競馬の遊びがあり、夜には題詠があったという。「納涼」の語は、前日までの酷暑を如実にものがたっており、また、「秉燭以陰…」は、『本朝世紀』の天候との一致を示している。

しかし、それ以上に、時の一人、道長のもとに、行成をはじめ、権中納言奔信、右中将兼隆らが集まって、暑さ凌ぎをしたという話は、常夏巻の源氏のもとへ、若い君達が集まり、納涼するという趣向によく似た話ではないか。こういう話は、当時の紫式部のもとへも届いていたのかもしれない。

それはともかくとして、前掲の久米氏の、常夏巻分析の如く、長保五年の夏は、一週間以上は「天晴」が続く、そうとうに暑い夏だったことは確かである。

以上の如く、玉鬘十帖の、螢巻の長雨、常夏巻の酷暑、野分巻の台風という天候の特徴は、きわめて長保五年の気象に近似していることがわかる。

筆者は前章で、玉鬘求婚譚の始発は、和泉式部と帥宮の愛の始発に近似すると述べた。その後、螢、常夏、篝火、野分という一連の巻々の気象もまた、和泉式部と帥宮の愛の一年である長保五年を暗示しているようである。

これは何如なる意味を持っているのか。一つには、玉鬘十帖が、長保五年が翌年ぐらいに執筆されたという考え方ができる。もう一つは、意図的に長保五年を讀者に読み取らせようとする目的があったという考え方があつた。つまり、この玉鬘求婚譚の背景に、和泉式部と帥宮の恋愛譚を讀者に読み取らせようとする意図のもとに、長

保五年の気象が取り入れられたという考え方である。いずれであるのか。あるいは、両方であるかもしれない。

三、玉鬘求婚譚の結末

玉鬘求婚譚は、源氏、兵部卿宮、冷泉帝といった最高級の皇族兄弟（冷泉帝は名目上は源氏らと兄弟）の間をゆらぎながら、結局、鬘黒右大将に落ち着いた。

玉鬘十帖の最後に位置する真木柱巻には、玉鬘の思いがけない運命と、鬘黒右大将のもとへの北の方一族の悲劇が描かれている。特に、前半部では、鬘黒と北の方の離縁と、玉鬘の、鬘黒邸迎え入れが描かれる。本章ではこの部分を問題にしたい。

時は冬、玉鬘を手に入れ、有頂天になった鬘黒は、玉鬘を自邸に引き取る計画をたてている。時々、物怪にとりつかれて、異常な行動をおこしていたものと北の方は、ある雪の日の暮れ方、六条院にいる玉鬘のもとへ出かけようとする夫の身仕度を手伝ううち、突然狂い出し、夫に灰を投げつける。ついに鬘黒は玉鬘のもとに逃げ出し、北の方は、父式部卿宮の迎えによって、里に退去する。年が明けた正月、男踏歌の日に、六条院から参内した玉鬘は、そのまま鬘黒の邸に引き取られ、以後、参内することなく、鬘黒邸で尚侍の職務にあたったのであった。

夫が他の女に夢中になり、その女を自邸に迎え入れる意志があり、北の方が里に退去するという話は、『和泉式部日記』語るところの、和泉式部と帥宮の恋愛事件によく似た話ではないか。

『和泉式部日記』によれば、和泉式部は、初冬十月ごろから、帥宮に宮邸入りを勧められており、長保五年十二月十八日、宮邸入り

を果している。翌長保六年（寛弘元年）正月帥宮の北の方は、姉である春宮女御城子の迎えにより、里に退去した。女の引き取りと、北の方の退去の順は逆だが、夫が他の女に夢中になり、顧みられなくなつて里に帰るといふ点で近似する。時期も、冬から正月にかけて、と一致している⁽¹⁷⁾。

が、さらにもう一つ、この玉鬘求婚譚の結末は、どうしても帥宮を連想させる要素をもっているのである。

鬘黒の北の方が里に退去した直接の原因は、北の方が、玉鬘のもとへ行こうとする鬘黒に灰をあびせかけたことにある。紫式部は、これを嫉妬のなせるわざとはせずに、ものけによるものとした。

鬘黒のもとへの北の方については、胡蝶・藤袴・真木柱・若菜下の巻々に点描される。

年経たる人の、いたうねびすぎたるを厭ひがてに、と求むなれど、……（胡蝶巻、三一173）

胡蝶巻では鬘黒が玉鬘を求めるのは、北の方がひどく年をとつて厭気がさしたからだとする。ところが、藤袴巻では、それを打ち消すかのように次のように言う。

年のほど三つ四つが年上は、ことなるかたはにもあらぬを、

人柄やいかがおはしけむ、嫗とつけて心にも入れず、いかで背きなんと思へり。（藤袴巻、三一335）

「人柄やいかがおはしけむ」に対しての答えが続く真木柱巻に、出て来る。

あやしう執念き御物の怪にわづらひたまひて、この年ごろ人にも似たまはず、うつし心なきをりをり多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、……（真木柱巻、三一349）

また

本性はいと静かに心よく、児めきたまへる人の、時々心あやまりして、人にうとまれぬべきことなん、うちまじりたまひける。

(同、三一—三五)

北の方は、以前からものけに取りつかれては異常な行動をおこし、鬚黒に厭んぜられていたという。里に退去した後も、若菜下にあやしくなほひがめる人にて、世の常のありさまにもあらずもちて消ちたまへるを…

(若菜下、四—五)

とあって、よけいひどくなっているようである。

つまり、北の方の、灰を投げるといふ行為は、単なる嫉妬や、一時的なヒステリーによるものではなく、一種の精神異常によるものと思われる。抑圧された感情から誘発されたことは確かであるとしても。

このような精神異常者の例としては、帥宮の父、実在の冷泉天皇があげられよう。『大鏡』『栄華物語』等によれば、⁽¹⁸⁾執念ぶかい物の怪がついていたというが、時には正気にもどることもあったという。これも帥宮を連想させる要素となろう。

帥宮の北の方は、東宮女御城子の妹で、和泉式部のために官邸を出たが、別に精神異常があったからではない。ところが、帥宮の前、北の方—かの道隆の三の君で、中宮定子の妹であるこの女性は、⁽¹⁹⁾常軌を逸した行動をした話が『大鏡』に伝えられている。

……まことにや、御心ばへなどの、いと落ち居ずおはしければ、かつは、宮もうとみきこえさせたまひけるとかや。(267頁)

来客があると、御簾を高々とあげて、胸をあらわに出して立っていると、学生を集めての詩作の会に、屏風の上から二、三十両ばかり

りの砂金を投げ出したとかの話があり、この女性は、どうも精神異常があったようで、そのために帥宮に厭まれ、帥宮から離縁されたようである。これは、鬚黒の北の方の境遇にかなり近い。

つまり、玉鬘求婚譚の結末——鬚黒の北の方の精神異常と里退去は、帥宮の前の北の方の精神異常の要素と、後の北の方の里退居の要素が、組み合わされてできているように思われ、自と帥宮という人物を示唆するものではないかと思う。

玉鬘求婚譚の結末と、『和泉式部日記』に描かれるところの、和泉式部と帥宮の恋の結末は、全く同じではないが、様々な要素は、帥宮や和泉式部を連想させるようになっているのである。

玉鬘求婚譚の始発、玉鬘十帖の気象とともに、玉鬘求婚譚の結末もまた、和泉式部と帥宮に深く関わっている。

四、虚構と現実

では、なぜ、玉鬘求婚譚に、長保五年から寛弘元年にかけての和泉式部と帥宮の恋愛譚が投影されたのであろうか。

ここで忘れてはならないのは、玉鬘十帖には、かの有名な、蜃巻の物語論が存在するということである。紫式部は、蜃巻で、玉鬘を相手にした源氏に

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節ぶしを、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしき事をとり集めたる、みなかた

がたにつけたるこの世の外の事ならずかし。…(以下略…)」

(螢卷、三一—204)

と言わせている。物語は所詮、虚言ではあるが、そこには現実以上の現実が描かれているのだと主張する。

『源氏物語』の作者が、さかんに史実を取り入れ、実在の天皇の名を組み入れることで、時代を延喜、天曆に設定している点については、清水好子氏『源氏物語論』に詳しい。また、『伊勢物語』『住吉物語』『落窪物語』などの先行文芸を取り入れ、換骨奪胎していることも、先学の諸氏によって明らかにされている。とくに玉鬘十帖に関しては、『住吉物語』を無視できない。²⁰⁾

本稿で指摘した、長保五年から寛弘元年にかけての、和泉式部と帥宮の恋愛話は、『源氏物語』執筆当時、かなり評判のスキヤンダルだったのではないか。螢卷が、玉鬘十帖の、それも、玉鬘求婚譚の始発に和泉式部と帥宮の愛の始発を近似させた胡蝶巻の、次に置かれている点、物語論が源氏と玉鬘の対話の中で展開されている点、を忘れてはならないだろう。「ありのままに言ひ出づる」のではないが、「見るにも飽かず、聞くにもあまることを」、「心に飽めがたくて」書きおくのだと主張しつつ、実際に、当時の大ゴシップを、大胆にも取り入れたのではなからうか。

これが、虚構である物語に現実らしさを与えているのは確かであるが、当時としては、読者と作者の間に、共時における高度ななぞときゲームが展開されていたのではないかという気がする。物語は、やはり楽しんで読まれたものであり、その当時の大きな話題が、うまく作品に組み込まれていることを発見し、秘かに楽しむという享受のあり方が、その当時も存在していたのではないかと思う。

現代でも、たとえば、小説や、少女漫画に、流行語や今評判の話題をまぎれ込ませて、読者がそれを発見して楽しむというところは行なわれている。次元が違うかもしれないが、こういったことと、たいてい違わないのではなからうか。紫式部の方が、かなり高尚ではあるけれど。

この玉鬘十帖は、当代の話題を巧みに取り入れながら、それがゴシップ的な話題であるため、延喜、天曆という時代設定を、ことさらに強調しているように感じられる。

初音巻、真木柱巻には、円融天皇の御世に廃絶し、一条天皇御世当時行なわれていなかった男踏歌が、二度にわたって取り上げられる。男踏歌が盛んに行なわれたのは、やはり延喜、天曆の頃である。玉鬘が六条院の一員となり、六条院を去る、その開幕と閉幕が男踏歌で示されているのである。

また、その中間に位置する行幸巻には、醍醐天皇延長六年十二月五日の大原野行幸が取り入れられているとの指摘が、『河海抄』以来なされている。

このような行事の散在が、玉鬘十帖の時間を当代から引き離し、延喜、天曆の時代へと引き上げる作用を果しているように思う。

ところで、玉鬘の運命は、和泉式部の運命に近似してはいるが、人物設定は全く対照的である。和泉式部は道長をして「うかれ女」と言わしめた。一方、玉鬘は、多くの求婚者たちにそつのない対応をし、藤袴巻では

女の御心ばへは、この君をなんもとにすべきと、大臣たち定め
きこえたまひけりとや。
(三一—338)

と言われている。片や悪評高い女、片や理想的な賢女と、きわめて

対照的である。玉鬘の夫となった鬘黒も、武骨一方の人物で、優美繊細な帥宮と、全く対照的に描かれている。

作者は、ここにおいて何を言おうとしたのだろうか。人間とは、その人柄のいかんにかかわらず、全く対照的な人間であっても、似たような境遇に陥ることがある。人の世とはそういうものだ、語りたかったのかもしれない。

五、長保五年から寛弘元年までが示唆するもの

玉鬘十帖には、長保五年から寛弘元年にかけて起こった和泉式部と帥宮の恋愛事件が巧みに織り込まれている。にもかかわらず、玉鬘の人物設定は、和泉式部とはかなりかけ離れている。前章に引き続き、この点を、玉鬘尚侍就任という立場から考察してみたい。

玉鬘は、源氏の苦慮の末、尚侍に就任する。尚侍には、朧月夜の君がいるはずであるが、冷泉帝の後宮には関与せず、朱雀院に侍していたらしい。しかも、若菜下で出家するまで「尚侍の君」と呼ばれている。冷泉帝の後宮では「尚侍宮仕する人なく（行幸巻、三十一292）」という状態で、「家高う、人のおぼえ軽からで、家の宮みたてたらぬ人」で、「したたかに賢き」適任者を求めているという。玉鬘は、その条件を満たす女性として設定されているのである。

この玉鬘尚侍就任に関しても、様々な論考があるが、本稿では、時代的背景を考慮に入れることによって、新たな意味付けを加えたいと考える。

玉鬘十帖が指し示す、長保五年から寛弘元年にかけては、時の権力者、左大臣道長が、長期政権を確保するために胎動していた時期でもある。

長保元年、第一女彰子の一条天皇入内を果し、長保二年、定子を皇后に、彰子を中宮にして一帝二后並立を強行した道長は、長保五年二月廿日、第一子頼通を批把第で元服させ、同夜、第二女妍子の初着装を行なった（『日本紀略』『権記』による）。彰子にはまだ子がなく、まさに胎動の時期である。道長は、現東宮（後の三条天皇）即位後、自分の外孫を順次皇太子にして、長期政権を確立するため、この第二女、妍子を東宮后にする心づもりでいた。

当時、東宮后には、敦明親王（後の小一条院）を生んで東宮の寵愛を受けていた城子がいた。一方、妍子はまだ幼く、入内するには早すぎた。

ところが、翌寛弘元年二月七日、尚侍従二位綏子が薨じた。綏子は、兼家女、道長にとっては、劣り腹の腹違いの妹である。尚侍となり、三条東宮に侍したが、濟時女城子、道隆女原子に圧され、源頼定と密かに通じて、鬘鬘を買った。その綏子が亡くなり、尚侍の席が空いた。道長は、東宮后への期待をよせつつ、十一月二十七日、妍子を尚侍とした。時に妍子は十一歳であった。妍子が東宮に入ったのは、寛弘七年十二月のことであり、城子とともに、三条天皇女御の宣旨が下ったのは、寛弘八年八月廿三日のことである。

綏子には、朧月夜の君を髣髴させるものがあるが、時勢は、それとは異なる新しいタイプの尚侍を『源氏物語』の中に要求していたのではないか。玉鬘が、源氏の苦慮の末、尚侍となるのは、朧月夜尚侍とは全くタイプを異にする、新しい尚侍として描かれるためではなかったか。当時、綏子によって作られてしまった朧月夜型尚侍のイメージを一新し、冷静で、賢明で、その無い対応のできる、新しいタイプの玉鬘型尚侍は、東宮后に予定されつつ、新たに尚侍

となつた妍子⁽²⁴⁾への期待がこめられているのではなからうか。

つまり、玉鬘尚侍誕生は、様々な意味づけができるけれど、寛弘元年の新尚侍誕生という社会情勢を反映して、時勢が(もしくは道長が)要求したものと考えることもできるのではなからうか。

『紫式部日記』寛弘五年十一月の条には、中宮の意向で、御冊子づくりが行なわれた記事がみえ、続いて、

局に、物語の本どもとりやりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やをら(道長が)おはしまして、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿(妍子)に、奉りたまひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし。⁽²⁵⁾

とある。この「物語」は『源氏物語』と考えられ、この時点において、『源氏物語』は、かなりの部分が執筆、改稿されており、中宮主催の大規模な清書作業が行なわれていたと推測される。そして、道長は、紫式部の部屋にあった原本の方をこっそりと持ち出し、妍子に与えてしまったというのである。これは、とりもなおさず、道長にとつて、『源氏物語』が、妍子に与えるにふさわしいものであったということにはかならない。

さらに、大胆な発言が許されるならば、玉鬘求婚譚の結末が和泉式部と帥宮の恋愛事件を暗示するということも、道長にとつて、きわめて都合のよいことだったのでないか、という推論を加えさせていたいただきたい。

理由はこうである。

玉鬘求婚譚の結末は、鬚黒の北の方の悲劇を描きながらも、一方、北の方側を揶揄的に扱っている。ものけによるとわかっている

ながら、北の方の行動を、そして、里退去という大胆な父式部卿官の判断を、嘲笑の対象としている。この北の方は、帥宮の二人の北の方の要素を重ね持つと、第三章で述べた。一人は、道隆第三女。定子⁽²⁶⁾の妹。もう一人は、藤原濟時の第二女。東宮女御、後の三条天皇皇后城子の妹である。そして、この二人は、共に、道長の長期政権を阻む可能性のある、二つの邪魔な存在の血縁者であるのだ。

当時、皇后定子はすでに亡く、妹の四の君御匣殿が、第一皇子敦康親王の母代りをし、一条天皇の寵愛をも受けて懐妊したが、長保四年六月三日に亡くなっている。不吉なことに、東宮女御であった道隆第二女原子も、同年八月三日、突然、鼻や口から血を吹き出して頓死したという。中関白家一門は、伊周が復位したとはいえ無官、隆家も復帰したばかりで、崩壊寸前であった。しかし、定子所生の第一皇子は厳として存在していた。

道長の長期政権は、娘の彰子が皇子を生み、その皇子が東宮となつてはじめて実現できる。彰子が待望の第二皇子を生んだのは、『紫式部日記』にも描かれる如く、寛弘五年九月十一日であった。この時までの道長にとつて、第一皇子は、目の上の瘤であったろう。しかも、道長にとつて、第一皇子の存在は、寛弘八年六月、第二皇子敦成期親王が東宮となるまで、邪魔な存在として意識され続けたことであろう。

帥宮の前の北の方は、才色兼備を誇る定子姉妹の中で、唯一、不出来な存在として、嘲笑の種にされていたのではなからうか。とくに、道長一派によって。

一方、道長は、先に述べた如く、三条天皇即位以後の政権確保のため、第二女妍子を東宮に納れることを予定していたが、東宮妃に

は、濟時女城子がおおり、正暦五（九九四）年五月には、敦明親王を生んでいた。また、先述の如く、道隆女原子は頓死している。しかし、妍子はまだ幼く、妍子が東宮に入ったのは寛弘七年十二月であった。道長にとって、城子と敦明親王の存在もまた、長期政權を阻む邪魔な存在として、常に意識されていたはずである。その城子の妹が、和泉式部に帥宮を取られ、城子の迎えて里に帰るといふ醜聞は、城子側を揶揄する絶好の材料となつたのではあるまいか。こうなると、この醜聞の主である和泉式部が、敦道親王の死後の寛弘六年、つまり、妍子が東宮に入る一年前に彰子に召し出されたのも、式部の才学もさることながら、道長の対城子一派政策の一端であつた可能性もでてこよう。

玉鬘求婚譚の結末に、道長の長期政權を阻む二つの存在——第一皇子一派と城子一派——にそれぞれ属する、二人の帥宮の北の方が暗示され、嘲笑の対象となることは、道長にとって、きわめて都合のよいことだったのでなからうか。深読みすぎるかもしれないが、一つの仮説として提出しておく。

以上、玉鬘十帖の成立に関して、歴史的背景から二点、考察を加えた。

六、結語

本稿が、玉鬘十帖に関して指摘してきた点は、まず、玉鬘求婚譚の始発と結末には、長保五年四月から寛弘元年正月にかけて起つた帥宮と和泉式部の恋愛譚が投影されていること。螢・常夏・野分といった一連の巻々の気象が、長保五年を暗示すること。玉鬘新尚待誕生には、寛弘元年の、尚侍綴子の死と、妍子新尚侍の誕生が背

景にあるらしいこと。さらに加えれば、すでに少女巻以降東宮后になるべく待機している明石姫の状況も、道長二女妍子に通じるものがある。

これらを総合すると、玉鬘十帖は、成立当時の特定の一時期、長保五年から寛弘元年までの社会のでき事や、社会情勢を反映していることがわかる。これはいかなる意味を持つのか。

ごく自然に考えれば、この時期か、あるいは、この時期からそう離れない時期に、玉鬘十帖が執筆されたという推測が成り立つ。とくに、気候の描写は、体験しつつか、体験後まもないか、詳細な記録が残っているか、のいずれかでなければ、現実とどう近似するものではない。前掲の久米氏の言の如く、野分巻の描写などは、きわめて迫力があり、現実感があるところからみて、長保五年からそう離れない時期であろう。

また、紫式部は、寛弘二年（あるいは三年か）十二月二十九日に、中宮彰子のもとに初出仕している。出仕となれば、当分の間は、精神的苦痛を伴うものであり、物語が書ける精神状態にあつたか疑問である。玉鬘十帖は、一連のものであり、かなり持続した精神状態で書かれたものと推測される。ということは、玉鬘十帖、もしくは、その原型は、長保五年か寛弘元年以降に書き始められ、式部の出仕以前に完成していたのではないか。出仕によって中断されたとすれば、それは、真木柱と、梅枝・藤裏葉の間と考えた方がよさそうである。藤裏葉巻の六条院行幸には、寛弘五年十月の道長邸行幸が投影されているといふ指摘もなされており、式部出仕後の可能性が高い。

物語が、たとえ時代を遡って設定されていたとしても、その物語

の執筆当時の社会状況は、自と反映されるものではなからうか。『源氏物語』は、むしろ積極的に、当時の評判の話題を取り入れ、それをおぼめかせるべく、時代を遡らせて描く、という一つの方法を用いているように思われる。また、玉鬘十帖は、長保五年から寛弘元年当時の政治事情をも内包しており、作者の立場が、時の権力者に傾斜していることも暗示している。それは、『源氏物語』の作者に、時勢が要求したことであつたかもしれない。

玉鬘十帖は、その内部に含む巻で示した物語論を、自ら体現すべく創作されている。物語は、時を自在に走り、人の世のありさま、現実を描くことができる、主張しているかの如くである。

玉鬘十帖が内部包含している長保五年から寛弘元年の要素は、時の権力者道長にとって、勸迎すべき内容を含んでいた。玉鬘十帖が、式部の出仕以前に書き上げられていたとすれば、それは、道長が、紫式部の彰子出仕を強力に要請した一因になっているかもしれない。

最後に、長保五年の氣象の詳細な記録があつた場合を考えておく。この場合は、出仕以後の執筆でいいわけだが、そこには、長保五年でなければならぬ強力な理由が必要となってくる。それは、やはり和泉式部と帥宮の恋愛譚の投影が意識的に行なわれたものであり、読者にそれを暗示するためということになる。さらに、第五章で提出した仮説が意味を持つてくるであろう。玉鬘求婚譚の結末が、対第一皇子一派と、対城子一派への間接的な揶揄を意味するとなれば、玉鬘十帖の成立は、寛弘年間であることに間違いない。そして、それは、紫式部が、出仕後、道長の意向を組んで執筆した可能性も出てくる。

(1) 並びの巻として古来問題にされてきたが、とくに、武田宗俊氏「源氏物語の最初の形態」(『文学』昭25・6、7)、風巻景次郎氏「源氏物語の成立に関する試論―玉かつらとその並の巻、桜人」(『文学』昭25・12、26・1)で成立過程がはなやかに取り上げられ、その後は、高橋和夫氏の『源氏物語の主題と構想』(昭40・6 桜楓社)、吉岡曠氏の『源氏物語論』(昭47・12 笠間書院)所収の論文等に構想的成立論として取り上げられている。また、山中裕氏は準拠の面から成立問題を考察する。

(2) 秋山虔氏「玉鬘をめぐって」(『源氏物語の世界』昭39・12 東大出版会)、森一郎氏「玉鬘物語の構想について―玉鬘の運命をめぐって―」(『源氏物語の方法』昭44・6 桜楓社)、後藤祥子氏「玉鬘物語展開の方法」(『日本文学』昭40・6)等。

(3) 野村精一氏「光源氏とその『自然』」(阿部秋生編『源氏物語の研究』昭49・9 東大出版会、所収)は「宇津保物語」に関して、『住吉物語』に関しては、三谷栄一氏「源氏物語における物語の型」(『源氏物語講座第一巻 昭46・5 有精堂)藤村潔氏「古代物語研究序説」昭52・6 笠間書院)、三谷邦明氏「玉鬘十帖の方法」(論集中古文学1『源氏物語の表現と構造』昭54・5 笠間書院)等。

(4) 本文引用は日本古典文学全集(小学館)による。漢数字は巻数、算用数字は頁数を示す。

(5) 本文引用は玉上琢弥氏編『紫明抄・河海抄』(昭53・8再版本、角川書店)による。405、406頁。濁点、句読点、「」は私見でつけた。

(6) 本文引用は日本古典文学大系(岩波書店)による。399頁。

(7) 他作説は今井貞爾氏「平安朝日記の研究」昭10、川瀬一馬氏「和泉式部日記は藤原俊成の作」(『青山学院女子短大紀要』第二輯 昭28・9)自作説は鈴木知太郎、岡一男、玉井幸助、大橋清秀、清水文雄、梅津真理子、尾崎知光、遠藤嘉基諸氏の論がある。

(8) 伊藤博氏「和泉式部日記の成立時期をめぐって」(『言語と文芸』昭35・5)

(9) 『和泉式部日記の研究』(昭36・11) 第一章、第五節、参照。

(10) 『源氏物語』成立時期研究の現状では、『紫式部日記』の記述から、『源氏物語』が、すでに寛弘五年から七年ごろには存在していたことが確認されている。しかし、五十四帖全体が完成していたかどうか、また、いつごろから書き始められたのか、確かな資料がなく、いずれも推測の域を出ない。

(11) 胡蝶巻に『和泉式部日記』が関わるとの指摘は、島津久基氏「源氏物語講話」、吉田幸一氏「和泉式部研究一」にあるが、藤岡忠美氏「源氏物語と和泉式部」(『解釈と鑑賞』昭43・5)では『日記』と限らず、和泉式部の和歌の投影であるところを筆者も一応この立場をとる。

(12) これを分解して、玉鬘系後期挿入説を説く立場もあるが、如何なるものであろうか。

(13) 『続・科学随筆全集4 地球との対話』所収。昭43。

(14) 昭53・8。中公新書。

(15) 本文引用は『増補史料大成』第四卷(臨川書店)による。200頁。本文には「卅日」とあるが、前後から考えて「廿日」の誤。筆者改める。

(16) 『栄華物語』巻第八、はつはな、では、北の方の退去に、東宮も妹子も関係しなかったと記す。事実がどうであったのかはわからないが、噂話としては、城子が迎えに行ったのだとも、いや、そうではないかったのだとも、両方流れていたのではなからうか。

(17) ただし、玉鬘十帖では、求婚譚の始発から結末までに二年が経過している。

(18) 『大鏡』師輔伝。『栄華物語』巻第一、月の宴。他に『古事談』、『江談抄』にもみえる。

(19) 『大鏡』道隆伝。本文引用は日本古典文学全集(小学館)による。

267〜268頁。

(20) 昭41・1刊。塙書房。

(21) 注(3)参照。

(22) 尚侍に関しては、後藤祥子氏「尚侍放」(『日本女子大学国語国文学論究』日本女子大学国語国文学会 昭42・6)に詳しい。また坂本和子氏「尚侍玉鬘考」(『国語と国文学』昭48・4)は春日・大原野の斎女という点から位置づけをして注目される。

(23) 頼通の元服が少女巻夕霧の元服に投影されているともいわれている。

(24) 女子の初着裳は、通常結婚の近いことを意味する。その意味で長保五年二月の妍子の初着裳は東宮入りを人々に予想させたと考えられる。尚侍綾子は死ぬ数ヶ月前から病にあり(『御堂関白記』による)、このあたりから、道長は、妍子が成熟するまでの間、尚侍にしておくことを考えはじめたのではないか。

(25) 本文引用は日本古典文学全集(小学館)による。205頁。

(26) この場合、成立時期推定によく引き合いに出される、源氏の「日本紀などはただかたそばざかし」(『螢巻三二』204)の発言が問題となるが、先に引用した『紫式部日記』寛弘五年十一月の条の記事から、改稿本の存在が推測されるので、出仕後、「日本紀の御局」と渾名された式部の反感や物語作家としての意識が、改稿の際、源氏の言を借りて表明された、と考えれば解決はつく。こういう解決が許されるかどうかは別問題として。

(27) 山中裕氏『歴史物語成立序説』(昭37・8 東大出版会)

(28) 寛弘八年六月、第二皇子敦成親王が東宮になった段階で、第一皇子一派は完全に退けられたことになるのだから。

(桐朋学園大、大妻女子大非常勤講師)